

スポーツとスポーツ社会学開題

佐伯 聡 夫

(高知大学文学部体育学研究室)

Examination on Sport and Sport-Sociology

by

Toshio SAEKI

(Faculty of Literature and Science Kochi University)

I. はじめに

現在、スポーツは秀れて客観的世界の事象として考えられている。特にそれは、筋肉と神経相関の問題として、自然科学的なものとして捉えられている。それは恐らくスポーツの主流が“競技”であることと、現実の競争社会を背景としてきたということが、勝敗の判定尺度として共通の客観的指標を要求することに関係しているだろう。

スポーツにおける最も客観的な側面は、Record である。客観性の重要視は Record 偏重としてあらわれ、人生は天国に到る道標というが如く、Sport は Process ではなく Result であるという思想を導く。

人間の行動に関する自然科学的認識は確かに有意義であるが、それだけでは人間を機械的な有機的連帯の中へとじこめてしまう。人間の生は架空の目的に対する手段の体系ではない。

従って、スポーツが人間の社会的行動である以上、それは単なる自然科学のメカニズムの中で捉えられるのではなく、社会的行動の動機付けやその制度的枠組としての価値や態度、社会構造などの文化的、社会的側面からも考察されなければならない。

スポーツが主として身体運動を示めず言葉になったのは近代においてであり、それは工業化に伴う労働の質的变化と身体運動需要が生じた事と関係している。

又スポーツが著しく倫理的・教育的になったのも近代においてである。それはスポーツの資本主義的性格と言っても良いだろう。

スポーツは文化現象として益々重要になりつつあり、そうした研究の重要性は大きい。

この論文はスポーツに関する社会学的研究の全般的視点について書かれたものであり、言わばスポーツ社会学の序論というべき性質のものである。

II. スポーツの概念と問題

スポーツという言葉は、中世フランス語の“desport”から出た“disport”の略された語であり“desport”は、気ばらしにする遊びを総称することばであった。現在その概念は不明確であり必しもはっきりした定義づけはなされていない。

例えば、英国の P. C. McIntosh は、Sport in Society の中でその事情を以下のように述べている。

“スポーツは多くの点で人間の生活と関係があるので、スポーツ活動を限定したり、その概念を規定することは困難である。スエーデンの Idrott, ドイツの Spiel, アメリカの Athletics には、

はっきりした定義が認められるがスポーツはそれ等よりもはるかに適用範囲が広い。フランス語の起源ではそれ(スポーツ)は、生活のいたましい、あるいは真面目なものからの気晴らしに名づけられていた。それ(スポーツ)は、山登りから恋をすること又、自動車レースから悪ふざけまでの広範囲な活動に適用されている。一つの名詞としてそれは男・女・ゲーム・娯楽・狩猟・戦い・冗談・植物の突然変異にまで言及する。(1)

このように多義性をもっているにもかかわらず、レクリエーションやレジャーの言葉が使用されるようになることに伴って、現在では一般に身体活動に重点を置いて用いられている。ここでも当面する問題として身体活動を中心としたスポーツの概念について考察することにする。

1. 幾つかの概念規定とそこに含まれる問題

Sport の歴史は人類の歴史と共に始まり古い。しかしながら現代のスポーツは、その伝統の起源を近代ヨーロッパに求められている。これは競技スポーツの具体的発展の事例が産業革命以後の英国に認められる事に起因している。よく知られているように競技スポーツの組織化や規範の確立等のいわば制度化は19世紀英国の中産階級の働きであって、その意味から現代スポーツの伝統を近代に求める事は正しいと言える。

しかしながら伝統は、当時の社会との相互関係によって形成されたもので、一概に近代スポーツの本質的側面とみることは出来ない。いうまでもなく近代スポーツの諸相は、伝統的スポーツの一面では捕えられないものであってそこにスポーツの概念を考えていく当面の問題がある。

1) 伝統的スポーツの概念と問題

伝統的なスポーツの概念は以下のような本質的性格をもっている(2)。

- ① 自己目的々活動として非実利的なものである。
- ② 人生にとって第2義的なもので、本務を妨げてはならない。
- ③ 個人的な事柄である。
- ④ フェア・プレー、スポーツマン・シップ等のスポーツ規範の強調。

このような伝統的概念の形成は、19世紀英国の中産階級との関連をゆきにして考える事は出来ない。それは同時に産業革命以後の資本主義の発展に伴う様々な社会変化と密接に結びついている。

この時期におけるスポーツには、貴族のフィールド・スポーツからブルジョアジーの都市的競技スポーツへの変化や教育的、倫理的意味づけがなされている。このような社会的状況のもとで形成された伝統的なスポーツの概念は、貴族から新しい支配階級としてのブルジョアジーに引き継がれた支配階級の論理の一面を反映している。即ち非実利的見解と、資本主義社会における倫理としての競争に対する態度形成の教育的、倫理的価値にスポーツの積極的な意味づけをしていることである。このような伝統的概念が大衆化へむかっている現在、現代スポーツの諸相をスポーツとして把握する事は困難である。アマチュアリズムは、その代表的な問題例である。

2) I. C. S. P. Eのスポーツ宣言の規定

1964年10月東京で開かれた International Council of Sport and Physical Education の総会に、以下のようなスポーツの定義を含んだ「スポーツ宣言」が提案された(3)。

- ① 遊戯の性格をもち、自己とのたたかひの形式をとるか、他人との競争を含む活動は、すべてスポーツである。

(1) P. C. McIntosh ; Sport in Society. p. 11 C. A. Watts & CO. LTD. 1963年.

(2) 竹之下休蔵, 磯村英一著「スポーツの社会学」p. 13~14 大修館 1965年.

(3) International Council of Sport and Physical Education ; Declaration on Sport. P. 1964年.

② この活動が競争的に行なわれるときには、それは常にスポーツマン・シップの精神をもって行なわれるべきであって、フェア・プレイのないところに真のスポーツはあり得ない。

この定義にみられるスポーツの概念の特色は、遊戯性と闘争性の結合という観点からの競争性の強調にみられ、そこからスポーツ規範の必然的な重要性を引き出していることにある。この宣言は、伝統的スポーツの考え方と、20世紀現代スポーツのさまざまな変化によって生じた問題との調整の必要という背景をもっており、現代スポーツの重要な問題である高度化したスポーツをチャンピオンスポーツとして位置づけようとするものである。

20世紀に入ってから Sport の著しい変化は、拡大（人口、種目など）と高度化の二方向にむかってみられる。チャンピオンシップ・スポーツは高度化にあらわれた問題であって、政治や経済との結びつきからその社会的機能は大きく重要な問題となって来ている。

即ち、ICSPEの宣言は、スポーツの高度化に対応して、伝統的なスポーツの概念を、拡大変更して行く方向と考えられる。要するに現代のスポーツが技術的水準の層化現象をもつことに応じて、その社会的機能の重要性を認識しながらそれに相応したスポーツの概念を考えて行く方向があるのである。

3) P. C. McIntosh の考え方と問題

英国の P. C. McIntosh はスポーツと社会の相互関連を歴史的に考察している Sport in Society の中に The theory of why and How という一章をもうけてその中で、スポーツを歴史的発展を考慮しながら考察している⁽⁴⁾。

即ち彼は、ホイジンガアの言う play の概念と Sport の関連の追究から出発しながらも、play と Sport の相違に注目し、play に Sport を対比することによって Sport を追求している。彼によれば Sport は活動それ自身によってではなく、スポーツが与えるところの満足の性質やスポーツの動機によって以下の3つのかテゴリーに分類される。

① Combat Sport ② Competitive Sport ③ Conquest Sport

更にこれに、その過程において身体感覚や運動を楽しんだり、情緒や理念を表現したり、伝達したりする第4の身体活動のかテゴリーを Sport 以外で重要なものとしてとり上げている。

この考え方は、スポーツを活動と活動を行なう人間の心理的側面との関連から明確にしようとするものであるが、この分類に共通するものは、何物かに対する挑戦 challenge（他者あるいは自分、自然あるいは状況）であり、この限りにおいて、それは伝統的なスポーツ概念と共通の基盤として禁欲的な要素に貫ぬかれており、19世紀的であると言わねばならない。従って現代スポーツの拡がりを第4のかテゴリーとして Sport の外に出し、把握しえないのである。

4) Walfenden Report の考え方

ICSPE の宣言がスポーツの高度化に対応したものであれば、英国の Walfenden Report の考え方は、スポーツの拡大に対応したものであると言える。即ち、あらゆるゲームやスポーツの他に、主として楽しみや、レクリエーションのために行なわれる屋内、屋外の身体活動のすべてを含めた。プロ・スポーツも除外しなかった。……何よりも、私達は、地域社会の一般的福祉に貢献するようすべての種目に関心を向け、そして必要な変更を加えて、これに該当するものは全てスポーツに含めた⁽⁵⁾。

このようなスポーツの考え方は、スポーツの社会的機能を重視し、スポーツを地域社会の福祉に役立つ身体活動として、野外活動全般からダンスを含む、広域な活動に適用しようとするものであって、競争性にとらわれず、（プロ・スポーツはアマ・スポーツへの貢献という社会的機能の故に

(4) P. C. McIntosh ; Sport in Society, p. 116~133. 1963年.

(5) Sport and the Community (The Report of the Wolfenden Committee on Sport) p. 3. 1961年.

含まれている。) スポーツの社会的側面を重要視したものとすることが出来る。

このような概念規定がとられるようになった事は、スポーツの必要性の社会的認識が高まった事によるのであるが、その意味で現実社会の明確な反映と言えよう。必要としてのスポーツは従来の伝統的概念でとらえられないものであり、スポーツ活動に必要な条件が個人的ではなく社会的に確保されねばならない現状から、そして又社会に対するスポーツの有効な機能の認識から、社会福祉という概念を導入してきたものである。

このようにスポーツの手段的側面を認める立場は、やはりこの立場から自己目的な活動としてのスポーツをどのようにみて行くべきかが大きな問題となろう。ウォルヘンデン・レポートにおいても、game for game's sake というものの重要性が認識されているが、地域社会の福祉との関連で、真に福祉となるものと手段、目的等の関連が今後の問題である。

5) ソビエトにおける Sport の考え方

ソビエト社会におけるスポーツは、マルクス、レーニンの史的唯物論に基づく文化理論によって考えられており、個人的、非実利的な伝説的なスポーツの考え方を支配階級の Sport として批難し、スポーツも他の文化と同様に社会的なものであって、以下のように明確な目標をもった手段として考えられている。

- ① Sport は労働と国防の為の身体、及び精神形成に役立つねばならない。
- ② Sport は運動を通して楽しむだけではなく労働を愛する事を教えなければならない。
- ③ Sport は、共産主義教育の統合部門として、共産主義の理念において身体的道徳的に来たるべき世代を育成するのに役立つねばならない⁽⁶⁾。

このような考え方は共産主義体制の明確な特色をみせている。即ち社会主義体制のもとでは、有ゆる活動が共産主義建設というソビエト社会の究極的目標に向かったものであってスポーツもその為に積極的な働きをなす手段と考えられるものである。

このような考え方は、ウォルフェンデン・レポートに共通する一面があるが、Sport の客観的な社会的機能を問題としていると言うよりも、共産主義イデオロギーによって判断された政治的教育的機能として考えられている。従って楽しみという点も考慮されているが、あくまでも、社会統制の手段として認められているにすぎない。

2. 社会現象としての Sport

これまで我々は、現代スポーツに対してとられている代表的な幾つかの概念について検討してきた。その中で我々が明らかにしてきた事は、スポーツの概念を把握する上で当面の最も重要な問題は、現代スポーツのさまざまな変化をどのように把握し、どのように位置づけ、どのように明らかにして行くかと言う事であった。

即ち、競争の社会的機能の重要性が、スポーツの技術水準を上昇させ、レベルから見た層化現象を呈することに伴って、レベルの維持の社会的必要性が競技者の Sport 生活を avocation の領域からしめ出し、更に物質や金銭との結合の可能性を強めている。一方、労働や社会生活の一般的な機械化や、都市化等の一連の現象を背景に、スポーツに関する社会的条件の種々の変化が、運動の機械化等の新しいタイプの活動や、自己の能力の誇示とは全く無関係な新しい行ない方を結果してきている。

我々はこのような現代スポーツの現状を問題とするのであって、固定的なスポーツ概念をとることによって他を“スポーツではない”としりぞけるのではなく、むしろ、この現状を、スポーツの基本的性格のどの面が、なにによって、どのように変化し、又それによってどんな新しい性格を帯

(6) H. W. Morton ; Souiet Sport. P. 17~31及び P104~122. Collier-Macmillan LTD. 1963年.

びたのかを明確にして行く必要があるのである。

我々がスポーツの概念を問題とするのは、スポーツはこういうものだということ、即ち実体を明確に打出す為ではなく、我々が研究対象とすべき現象の問題や領域を明確にして行くためである。スポーツは物体の名前でもなく、明確な目標をもった作用でもなく、人間のある活動の名称、いわば“もの”としての活動であって、その機能や意味内容は歴史的社会的な背景のもとに変化するものであり、その変質せざる本質を科学的に明らかにすることは困難であって、我々が問題とすべきことは、変化そのものの社会的様態であり、その因果的関連である。即ち我々が問題とすべきことは、実体ではなく、現象である。スポーツという社会現象があらゆる発展の論理的基盤はどこにあるのか、その現象を構成する要素としての基本的性格はどのような特性として明らかにされるか、という事なのである。

3. 現代社会におけるスポーツ

A. A. Brill は、スポーツは闘争本能に根ざした活動として以下のように述べている。

“スポーツやゲームは支配衝動の積極的表出であるところの攻撃的分力に根源しており、全ての人は、攻撃的分力を生まれながらにして持っており、それは生存の為の闘争における原始的武器である。生活の条件が穴居時代以来、改善されたにもかかわらず、この原初的な本能は行使されねばならない、そしてこの目的のために人類は人工的危険を伴う為の闘争であるスポーツやゲームを工夫したのであった⁽⁷⁾。”

このような見解にみられるものは、スポーツは人間の基本的欲求に対応した生物機能を果す為の活動と考えている。

又、Encyclopedia of the Social Science の中で A. Parry は、“スポーツは、初め、生産の為の闘いに対する人間の訓練を表わしていた。動物と人間の闘いを含めて、フィールドのスポーツは原始社会においては、娯楽というよりもむしろ、実利的な事柄であり、食物供給の主要な手段であった。後には狩猟も人間間の闘争と同じように戦いの為の準備として役立っていた。競馬のように人間に飼育された動物の闘いもこの類型（戦いの準備）に含まれる⁽⁸⁾。”と述べ、スポーツ活動の原型が実利的な闘争あるいはその準備という手段的なものからの出発であることを主張している。

しかしながら、このような闘争がそのままに止まっていたのではない事は確かである。語源的に考察するならば“スポーツ”は「面白さ、楽しさ、慰み、気晴らし」等のより根源的な概念に還元し得ない特質、即ち人間の心の本質の中に根ざした観念に結びついており、これらの観念は、ホイジンガアの play の概念によるならば、その play の中に特徴的にみうけられるものである。更に“スポーツ”の活動形式は、自発性・分離性・不確定性・非生産性・規則性等のホイジンガアやケイロイによって明らかにされている play の形式的特徴を備えている⁽⁹⁾。

我々はここで“闘争”とか“遊戯”とかの概念を用いる事によってスポーツの本質を把握し得るとは思わない。しかしこのような人間活動の基本的な性格を求めることによってスポーツの諸相を説明しうることも出来よう。ここでは、以上の事柄から、スポーツは闘争の遊戯化から始まったと考え、この基本的性格を考慮しながら現代スポーツの諸相を考察して行きたい。

スポーツが闘争の遊戯化から始まったと考えられるならば、すでにそこにスポーツの社会的側面の重要性がみられる。なぜならば生存の確保に向けられた活動としての闘争が、遊戯化され、非実利的になる為には一定の社会的、経済的条件が必要なのであるから。

(7) R. H. Boyle ; Sport mirror of American life, p. 58~59. Little, Brown & C. 1963年.

(8) A. Parry ; Sports, Encyclopedia of the Social Science. Vol. XII p. 305~308. 1959年.

(9) R. Caillois ; Man, Play, and Games. p. 3~10p. The Free Press. 1961年.

1) スポーツの拡大

スポーツの拡大は一般に大衆化と呼ばれている。大衆化は、他の文化においても問題とされているように、単なる量的な問題だけではなく常に質的問題をともなっている。即ち、スポーツについて言うならば、拡大は、量的側面としてスポーツ人口の増加であり、質的側面としては新しい身体活動の領域や種目であり、新しい行ない方のあらわれである。

① スポーツの量的拡大

機械化に代表される現代の合理化が、レジャーの増加を伴った生活水準の上昇と都市化や機械化を我々にもたらした現在、人々は Sport の必要性和可能性とを同時にもちたされたと言える。

労働時間の法的規制がスポーツ人口の増加の最も基本的な要因であったことは、英国の例をみても明白である、と同時に労働時間の規制は社会的必要とみとめられて初めて成立した事柄でもあった。

都市生活の疎外的要因はもとより、大衆のさまざまな文化領域への可能性が、必要性に裏打ちされていることに大衆文化の量的、質的問題がある。ヴェブレンの言うように「発明は必要の母」、娯楽産業はすでに現代の“必要”であろう。

② スポーツの質的拡大（種目、行ない方等）

遊戯がその存在する社会の基本的な価値を反映する以上、スポーツ活動の形式も社会を反映して行く。闘争、即ち生存の条件の確保に向けられた活動、が combat → competitive に変化して行き、更に闘争性を欠如し、自然や状況に対する挑戦という要素を持った Conquest Sport が19C後半から登場した。この conquest という概念こそ19C後半からの人間の生存の条件の確保に向けられた活動の象徴である。即ち、生産活動の一般的形態を生み出す自然科学を始めとし、思想を含めて有ゆる科学、哲学がこの時以来……具体的には産業革命以来……自然に対する挑戦を始めたのであった。

近代の competitive sport と conquest sport は上記の意味から、同じ社会の反映とみられる。石炭と鉄に象徴される産業革命は、近代、市民社会の出発であると同時に、限りない自然への挑戦の出発でもあったのである。

現実の社会において、真の意味で競争したり挑戦したり出来る者は、ブルジョアジーを中心とする支配階級であったように、スポーツの世界においても階級的差別があったのは明白である。

そして20世紀に入ってから社会は、独占資本主義による集団競争社会、機械化社会、さまざまな文化の大衆化の可能性と必要性をもった大衆社会などの多角的な問題を含んだ社会である。この社会は、有ゆる部門におけるエリートを排出せしめ、同時に大衆を競争から逃避させ（集団競争社会）、又、レジャーを自己実現に使える程の社会的条件を持たない人々にまでレジャーを拡大し、（大衆社会）さまざまな運動への機械の導入、日常生活の創造性の欠如、画一化、商業化、疎外状況などの社会である。

現代スポーツの諸相はこの社会的状況の反映である。即ち、自然に対する挑戦と言うよりも、自然との調和とも言うべき野外活動、スリルや冒険を求めての機械化スポーツ、challenge の要素を欠如した行ない方、最も高度には人間の内面の探究ともいうべきものから単なる感覚の楽しみまでの表現運動などの登場は、前述の社会の反映である。

スポーツの概念規定における一つの問題は、この現代スポーツの質的变化（最も高度な行ない方から、最も低度な行ない方、及び新しい種目の登場）をいかに把握するかということであった。そして今まで明らかにしてきた事は、質的变化の基盤は、量的変化（大衆化）にあり、それは現代社会の反映に他ならないという事であった。

要約するならば

伝統的スポーツの概念は、19世紀的なもので、近代資本主義社会の出現という新しい競争社会と有ゆる分野における自然への挑戦という社会的状況を反映したものであった。そして同時にそこにおいては、スポーツはリベラルな活動として自己実現に向かえる社会的条件を備えた階級において行なわれた階級文化として存在していたのである。

現代社会は大衆社会として様々な問題をもっている。スポーツも同様である。プロやチャンピオンはスポーツの大衆化によって成起したエリートである。大衆化の可能性の裏にある必要性は、目的としてのスポーツではなく、手段としてのスポーツを必然的にひきおこした。レジャーは大衆にとって、獲得したと言うより与えられたものであり、そこにおけるスポーツの拡大は、スポーツを高度な意味で目的化する社会的基盤の上にあるわけではない。名誉や優越性は社会的には階級的なものである。レジャークラスからブルジョアジーの19世紀の階級的スポーツを支えた社会的条件を大衆は持たないのである。ここに量的変化の質的転換があるのである。しかしながら、レジャーが我々の意識の中においても必要を越えて、なんらかの意味での発展に向けられるような社会的条件が整った時には、新しい形態としての表現運動が人間の内面への探究——ある意味で人間への挑戦——へ向かうならば、現代スポーツが生の問題としてのレジャーにおいて果す機能は、競技スポーツに代表される人間の身体的能力の自己実現とは別に、重要な意味をもつと言わねばならない。

2) スポーツの高度化 (レベル……技術や記録)

スポーツの高度化には、スポーツの基本的性格としての内部的要因とその社会的機能の重要性から記録に対する社会的圧力としての外部的要因との二つの側面がとらえられる。しかも、スポーツの高度化はプロフェッショナル・スポーツと、チャンピオン・シップ・スポーツの二現象をみせており、各々の社会的機能の相違は、共通の基盤をもちながら、異った社会的圧力としての社会的要因の結果である。

① 高度化の内部的要因

スポーツが闘争の遊戯化に始まったと考えられるならば、そこに“勝利”の観念が本質的な要素となる事は疑えない。“勝つ”ということとは、ホイジンガの言うように、力や支配に対する渴望と同様に、他人よりもぬきんでたいという人間の願望である。しかも“勝つ”という事は、自己目的的活動としての遊戯の唯一の明確な目標となりうる。この“勝利”に対する願望の達成は、身体の練磨や競技における技術の練磨に依存しているものであるから、必然的に、高度化に向かうのである。しかも勝利は常に名誉と尊敬を付帯し、名誉と尊敬はすぐさま勝者の所属している集団の全体に拡大されてゆくのである⁽¹⁰⁾。

② 高度化の外部的要因

競技における技術や身体の練磨は、一定の社会的条件のもとにはじめて可能になる。ここに内部的要因の外部的転換が起こる。即ち、競技者は一定の社会的条件の確保の為に自分を商品化する必要が生じるのである。しかも競技者の商業的、政治的価値は競技者の競技レベルに相応している。“勝利”は遊戯の世界に止まらず、日常化して行くものであり、ここに高度化した Sport の遊戯圏からの分離の原因がある。

a プロフェッショナル・スポーツ

Inderustrialization の進展が娯楽産業という新しい産業形態を生み出した社会的基盤は、そのまま、プロフェッショナル・スポーツ形成の現代的な要因である。

スポーツの娯楽としての機能が重要となると、専門家が登場する。それは才能や能力のある者が、特定の人々(昔は貴族、今は大衆)の競技を代行するのである。この意味からプロ・スポーツ

(10) J. Huizinga; Homo Ludens, p. 50. Beacon press 1950年.

を考察する場合に観衆を無視する事は出来ない。プロの商品的価値は観衆の動員にあり、それは競技の魅力である高度な緊張とそのカタルシスにある。従って高い競技水準が必然的に要求されるのである。

ここでは重要な事は、どんなに競技水準が高くなっても観衆にとってはプロ・スポーツもやはり遊戯であるという事である。もし、プロ・スポーツが完全に遊戯の世界から分離してしまうならば、娯楽としての機能は保持しえないのではないだろうか。

b. チャンピオンシップ・スポーツ

チャンピオンはプロとならんでスポーツ文化の発展の一面をになう。スポーツのエリートである。しかしながら現状では、政治的商品となっていないわけでもない。それはスポーツがその社会の全体文化の単なる一側面であるという事実にもかかわらず、“健全な精神は、健全なる肉体に宿る。”という幻想にも似た、個人の能力は、その所属する社会の能力であり、優秀な記録は選手強化よりも文化水準に依存しているという不明な論理にもとづいている。それはアマチュアリズムという、スポーツのエリートとしてのプロを、認めない事柄に関連している。

チャンピオンはすでに国際的な問題である。それはスポーツの emotional な側面の過度の強調とイデオロギー以前のナショナリズムのイデオロギー的利用にも密接に関連している。そこには体制の違いから、経済的な国際競争という背景も考えられなければならない。

3) ま と め

スポーツを科学的にとらえようとするならば、我々は問題を、ある概念規定によって固定的に捉えるべきものではない。闘争性、遊戯性という基本的性格が、すでに社会的なものである以上、スポーツの性格が、その存在する社会を反映し、そこに応じた性格をもつことは明白である。

本節における、“3. 現代社会におけるスポーツ”でとり上げられた事は、スポーツの概念に対するさまざまな問題の社会学的見解についてであった。

スポーツが、その存在する社会を反映することが認められるならば、スポーツはその時代の社会の構成要因によって説明されるのである。ここにおいては、現代スポーツを現代社会の特徴的傾向である大衆社会論との結びつきで論じたわけであるが、社会学的には、大衆社会という現象を呈するところの基本的な動因との関連から説明されねばならないであろう。いわゆるそのような歴史的な変動の理論をもって、はじめて、現代スポーツの諸問題の因果的説明及び解決の為の思索が生まれてくるのである。もちろん、社会現象の含んでいる問題をどのような歴史的変動の要因によって意味づけるかは、社会学上の重要問題であってさまざまな異論があろう。しかしそのような現象が単一の要因によってではなく、複雑な要因の交錯したものによることは明らかである。

従って、問題解明のためにどのような方法がとられるべきかは、早急に要請されている問題である。故に、次節においては、“スポーツ社会学論”をとり上げたい。

III. スポーツ社会学論

1. 研究の必要性

スポーツの社会的機能は、古くから、例えば古代ギリシャにおけるオリンピアの祭典にみられるごとく、重要視されていた。しかしそれが学問的に社会学として研究されるようになったのは近年になってである。A. Wohl によれば、スポーツの社会学と題された著書は1921年、ドイツにおける H. Risse のものが最初であるとされている⁽¹¹⁾。

現在では ICSPE においても社会学部会がもうけられ、国際社会学会への加盟も認められるよう

(11) 竹之下休蔵、磯村英一著「スポーツの社会学」P. 22 大修館 1965年。

になった。

このような状勢は、スポーツに対する社会的な関心や、必要性の認識に基づくものであろうがそれにはいくつかの要因が考えられる。前章でも述べたようにスポーツが各々の国において一般的な社会問題となったのは20世紀に入ってからであって、近年その傾向が益々強くなったことである。即ち、機械化の進展による労働の質的、量的変化、都市の拡大や交通の整備発達、生産性の向上による生活水準の上昇、教育の普及、レジャーの増加の問題、等、現代社会を特色づけているさまざまな社会的条件がその基本的な要因であろう。これ等の要因を背景にした二つのスポーツの問題がスポーツの社会学的研究を必要にしたのである。

第一に大衆化と呼ばれる現象であって、上記のような社会的要因に基づく、スポーツの必要性和可能性によって生じたものである。この大衆化現象によってスポーツは個人的な問題ではなく、社会的な問題として、考えられる必要が生じたのである。スポーツ社会学の最も大きな成立基盤はこれに有ると考える事が出来る。

第二に顕著なことは、プロフェッショナル・スポーツやチャンピオンに象徴される非常に技術水準の高度なスポーツの出現である。これ等は一つは、娯楽産業の一形態として社会的経済的に重要であり、又国際競技とのかかわり合いで、政治との結びつきを強くしてきている。スポーツの概念が国際的に問題となったのもここから派生している。これ等は、イデオロギーや体制にも絡む複雑なかつ重要な社会的問題となっており、スポーツの社会学的研究を必要としているものである。

更に現実には、大衆化と高度化という、共通の基盤に有りながらも異質な発展の方向が、いかに調整されるかという事がスポーツの社会学的研究を必要とする重要な問題である。我国においては、教育における主要なスポーツの問題はここに在るし、又スポーツ集団の組織化、施設などの問題の所在も多くはここに在るのである。

要するにスポーツの社会学的研究の必要性は、スポーツの社会的機能の重要性によるものであって、現代社会においては、大衆化における機能と高度化における機能の二つの重要性、及びその調整の必要性によると言えるであろう。

2. スポーツ社会学の性格

1) スポーツ社会学とは

前述のような社会的背景のもとに成立した以上、スポーツ社会学が、社会学の一般的性格としての実証性と、実践性をもつことは明白である。従って竹之下先生の言われるようにスポーツ社会学は、社会学の特殊的、専門的分野として、また、スポーツ科学の基礎的部門として、スポーツの事実や問題の社会的側面を客観的、実証的に研究しようとするものである⁽¹²⁾。と言える。

スポーツ社会学は基本的には二つのもの、スポーツと社会学によって規定されている、前者は学問の対象とすべき事象、現象をあらわしており、後者はアプローチの方向と方法を規定しているものである。

従って、スポーツ社会学は、社会学の対象となりうるスポーツの実証的、科学的研究であって、いわば社会現象としてのスポーツの研究であると言える。

スポーツ社会学の学問的性格は本質的に社会学によって規定されているのであるが、社会学の性格についても、さまざまな異論がある。しかしながら一般的にその実践性にもかかわらず、あるいは実践性故にとも言えようが、科学としての客観性が基本的に必要なことは認められよう。社会学における科学としての、普遍的な認識の為に、深い洞察によって新しい方法を確立したM. ウェーバーは、社会学は、「社会的行為を解釈しつつ理解し、そうすることによって、その経過と諸結

(12) 竹之下休蔵、磯村英一著「スポーツの社会学」P.18 大修館 1965年。

果とを因果的に説明しようとする科学」⁽¹³⁾であると言っている。この意味から、スポーツ社会学は“社会現象としてのスポーツを、客観的、実証的に研究し、現象間の因果関係、及びそこに働くさまざまな社会的要因等の科学的認識によって、社会現象としてのスポーツの普遍的法則を明らかにし、現実の問題解決に役立てようとする”ものであると言えよう。

研究の客観性は、アプローチの方向を決定する対象のとらえ方、即ち、社会現象としてのスポーツの把握の仕方から始まる。レジャーに関する社会学的研究で著名なフランスの社会学者 J. Dumazedier は International Research in Sport の中に The point of view of Social Scientist という論文をのせ、その問題を大要以下のように述べている。

「社会学的研究は、事実、現象の科学的認識であって、善悪の問題とは離れて考えなければならぬ。しかしながらそれは善悪の判断をする道徳的研究や、善の普及をねらいとする教育的研究と矛盾するものではなく、むしろその基盤となるべき科学的知識を供給するものである。……スポーツという社会現象は一様ではない。従って現象のとらえ方も現象に応じた領域がとられなければならない。例えばプロフェッショナル・スポーツは職業……、労働社会学、学校スポーツは体育……教育社会学というようにである。⁽¹⁴⁾……」

このような見解は、機能主義的な傾向が強いとも言えるが、対象領域の問題とも関連して重要だと言わねばなるまい。

2) スポーツ社会学と体育社会学

スポーツ社会学の性格に関連して重要な問題は、スポーツ社会学と体育社会学の関連である。

この問題は、体育が本質的には価値実現への働きであるから、従って、スポーツの概念と、体育の概念の相違からも、両者の社会学的研究を同一にする事は出来ないと言われている⁽¹⁵⁾。

体育はその成果達成の為にスポーツに負うところが大きい。従って、両者は常に密接な関連をもっている。スポーツが社会的な問題となればなる程、価値の問題はスポーツに関連してくるのであり、体育として行なわれる身体活動は、スポーツの領域の大きな部分を占めるのである。

しかしながら、さまざまな問題をもつものにも拘わらず、一般的には以下のように言えるであろう。

体育は、一般的に、教育の一分野として、身体運動によって個人を、そして社会を望ましい方向に変えようとする働きとして考えられている⁽¹⁶⁾。従って体育社会学は、この価値実現へ向けられる活動としての体育の社会的現象（体育と呼ばれるところのスポーツを含む）の社会学的研究、及び体育の為の基礎的研究としてのスポーツに関する社会学的研究と言えよう。

スポーツの社会学は、教育の領域以上にわたるものであることは明白であろう。又スポーツ社会学は、実践科学でありながらも体育社会学に比して、事実認識という傾向のつよい科学である事も認められよう。

要約すれば、体育社会学は教育事象としてのスポーツをより実践的な意味から問題とするものであり、かつスポーツ社会学の一応用領域を含むものとも言える。

しかしながら、これ等の問題は、用語の明白な概念規定が確立されていない以上、なお今後の重要な問題である。

3) 研究の一般的傾向について

この両者の関係、及びスポーツ社会学の性格について、昨年（1967年）国際スポーツ社会学会議

(13) 日本社会学編「現代社会学入門」P.180 有斐閣 1962年。

(14) I. C. S. P. E. 編「International Research in Sport and Physical Education; Sociology より The Point of View of a Social Scientist; by J. Dumazedier」1966年。

(15) 竹之下休蔵、磯村英一著「スポーツの社会学」P.19～20の大要 大修館 1965年。

(16) 竹之下休蔵、磯村英一著「スポーツの社会学」P.20 大修館 1965年

に出席された竹之下休蔵先生は、その時の各国のスポーツ社会学者との話し合、及びその後の欧米の視察から、スポーツ社会学に関する世界的な状況について以下のように述べられている。

“スポーツ社会学の確立の動きは、国際的であるが故に複雑な様相を帯びて、困難な現状である。それは各々の国における研究の社会的背景及びスポーツに関する社会的問題の相違、研究者の立場の相違から引き起こされる事である。しかしながら一般に以下の3つに分けられる。

- ① 社会学者がスポーツ社会学をやっている所 (ヨーロッパ)
- ② 体育やスポーツ学者がスポーツ社会学をやっている所 (日, 米)
- ③ 社会政策という立場からスポーツ社会学をやっている所 (共産圏)

このような3つの立場は、各々問題のとらえ方に多少の相違がある。従って現状のまま体系化に向かうことは困難であり、その意味から、各々の研究を進め、理論の確立から体系化の方向へ進むものと思われる。”

このような現状から早急なスポーツ社会学の体系化は困難である。しかし問題が社会的に重要になればなる程、研究も進められるであろう。

スポーツ社会学は社会現象としてのスポーツを扱うのであるから、社会現象のとらえ方及びその体系化に社会学の理論の適用が重要であることは言うまでもない。その際スポーツの特殊性をどのように考えて行くかが大きな問題であろう。

3. スポーツ社会学の問題

1) A. Wohl の考え方

1965年の一月、ワルソーにおけるスポーツ社会学会議にポーランドのスポーツ社会学者 A. Wohl が“Conception and Range of Sport”と題する提案を行ない、その中でスポーツ社会学の4つの問題領域を上げている⁽¹⁷⁾。即ち

- ① entertainment の特殊な形式としてのスポーツに関するもの。
- ② 競技に関連した問題。
- ③ スポーツによって形成される特殊な社会関係や社会構造。
- ④ スポーツの社会的機能や効果を高める為の事柄についての研究。

である。①は、何をもって、誰とプレイするかというような問題であり、②は競技者と観衆の相互依存関係や、文化の一特殊形態としての競技会の独自の価値、観衆の行動様式、その他の問題であり、③は連盟やクラブ等の組織、及び国際関係、人間関係や人種、宗教などに関連したスポーツの社会的統合についての機能等の問題であり、④は、①②③の包括的なそして体系的なものとして、スポーツの社会的機能を高め、大衆化を促進したり、組織化を進めたりする為の政策に関する問題である。

このような問題領域の設定は、現代スポーツの多様性を十分に把握する事が出来るか疑問である。もちろん体制の違いによる社会問題のとらえ方にもよるだろうが、4つの領域区分が明白な区分になっているとは言えない。例えば、①と②は③の特殊形態とも言えるし、②は①の主要な問題の一つであろう。

恐らくこのような関連は、スポーツの実践的な価値実現の方策を追究する共産主義圏における研究の特殊な立場を反映しているものと思われる。

2) Max Horkheimer の見解

ドイツの著名な社会学者 M. Horkheimer は彼独特の社会学的立場、即ち精神分析方法、から

(17) A. Wohl; Conception and Range of Sport Sociology, 1965年.

問題を提起し、以下のような領域を説定している⁽¹⁸⁾。

- ① プレイヤー間の人間関係
- ② プレイヤーとコーチ、トレーナーの人間関係
- ③ 競技相手との人間関係
- ④ レフリーについての問題
- ⑤ 観衆の問題

このような Horkheimer の考え方は、現実の社会の認識が特に人間の社会的関係の変化から出発している彼の社会学上の特色によるものである。彼によるならば Sport 社会学は、Sport によって構成されるところのさまざまな人間関係を研究すること、いいかえれば、“スポーツにおける社会”の研究であると言える。しかもスポーツの現代社会における重要な機能は、一つの秩序あるモラルをもった全体社会としてのその存在にあるものとして、目的としてのスポーツの必要性を強調している。

スポーツの社会学がスポーツにおける社会を問題とすることは確かである。しかしながらそれだけで、現代スポーツの諸相とそこに働く社会的要因を全て把握しうるか疑問であろう。例えば、高度化や拡大における問題やそこに働いた社会的要因をどのように位置づけるのであろうか。

これらは、恐らく、現実社会の人間関係とモデル社会としてのスポーツにおける人間関係という社会学的問題のとらえ方と、現代スポーツそのものの、具体的問題からの出発との違いによるものと思われる。

それは、社会学者の問題のとらえ方は、現実社会へのスポーツの貢献という点が強く、体育やスポーツ研究者が現実のスポーツの問題解決の為の社会学的研究の必要という点が強いという相違でもあろうか。

3) J. Dumazedier の見解

J. Dumazedier は、研究における客観性という問題から機能主義的見解を表明している⁽¹⁹⁾。即ち、大要以下のように述べている。“一般的にスポーツはレジャーにおける3つの機能、①日々の生活の疲労からの回復である relaxation, ②単なる社会における一機能として、行為や思考の領域を広げる recreation, ③単なる社会における一機能としてではなく、全体としての人間を高める free-development, を持っており、この意味からスポーツはレジャーと呼ばれる社会現象であってその研究領域はレジャー社会学の中にあると言える。

レジャー現象として Sport をみるならば、スポーツは以下の3つの領域に分けられる。(レジャーの機能に対応して)

- ① Sport as performance
チャンピオンシップ・スポーツに関連してオリンピックに典型的にみられるもの。
- ② Sport as game
①とは別に、recreation の機能に相当するもの。
- ③ Sport for health
健康や心理的回復をめざしているもので、relaxation の機能に相当するもの。

しかしながら、スポーツの社会現象は多様であって、必ずしも一様ではない。従って、いつもレジャー社会学としてとり扱う事は、客観性の点においても問題である。だから、スポーツ社会学の

(18) I. C. S. P. E. 編「International Research in Sport and Physical Education; Sociology より New Patterns in Sociol Relations, by Max Horkheimer」1966年。

(19) I. C. S. P. E. 編「I. R. in S. P. E. : Sociology より The Point of View of a Social Scientist by J. Dumazedier.」1966年。

対象領域はスポーツの機能に応じて決められるべきである。例えば、プロフェッショナル・スポーツは専門職業であるから労働社会学の領域で、学校スポーツは体育であるから教育社会学の領域でというように。”

このような考え方は、現代スポーツの複雑性にもっとも相応しているものである。しかも価値判断を排除するという客観的な科学性という点においても、注目しうる見解であろう。

しかしながら、一般社会学における機能主義的傾向が“これをもってしては(社会学的機能主義)、社会の持続を説明することはできても、社会の変動を説明することはできない⁽²⁰⁾。”と批判されるように、この見解には、現代スポーツの諸問題を成起させている社会的諸要因の解明へのアプローチが弱く、いわば、その次点で完結しがちな、歴史性や問題の把握が困難となる欠点があるように思われる。

例えば Dumazedier は Sport as leisure の Sport as performance に、チャンピオン・シップ・スポーツを典型として考えているが、これは free-development という leisure の機能に相当するものと考えられている。しかし、チャンピオンシップ・スポーツの問題は free-development という、いわば内部的な要因だけでは説明しえない。この問題を高度化の問題としてとらえるならば、スポーツの高度化を促進する要因として、第一節でも明らかにしたように、政治や経済の社会的諸要因との結びつきを考慮する必要があるわけである。そこには記録に対する社会的圧力があり、それ等の要因の解明こそ、今日のスポーツ社会学が当面している一つの重要な問題であるのだから。

4) 新しい問題領域の設定のために

スポーツ社会学の問題領域の確立が困難な事は、研究の歴史が浅いことにもよるが、それは同時にスポーツをめぐる諸問題が複雑であることを現わすものである。

スポーツ社会学の問題領域の分け方、あるいはその構造化については、二つの大きな角度が考えられる。即ち具体的なスポーツの諸問題から入る場合と一般的な社会学理論による場合とである。

スポーツ社会学が社会現象としてのスポーツ、即ちスポーツの社会的側面を研究する以上、社会学の理論が重要なことは言うまでもない。

しかし、この点から考えるならば、スポーツ社会学の領域は、その問題所在の特殊性から、①スポーツによって形成されるところの特殊社会を研究する領域、②スポーツと現実社会との相互関連を研究する領域、の二つに分かれるように思われる。

①の領域には、集団の内部構造や、文化としての規範、あるいはパーソナリティ形成というような問題が含まれ、方法的には一般社会学の理論が、スポーツという特殊性の配慮のもとで、適用されるものである。

②の領域は、現代スポーツの具体的問題に直接アプローチする最も重要な領域である。現実には、スポーツ社会学の体系化の問題は、この領域のとらえ方によるものと思われる。

スポーツ社会学の社会学における専門的分野は正にここにあって、その意味からも、この領域における理論構成は、Sport 社会学としての新しい理論構成として創り出されねばならない。Dumazedier や Horkheimer はこの領域における一側面からの問題をとらえている⁽²¹⁾。即ち、スポーツの現実社会に対する機能である。しかしながらそこには、スポーツの問題解決の為に更に重要な問題 ①スポーツが現実の社会を反映することによって、スポーツの形態や機能をどのように変えて行くか、②それは現実の社会のどのようなメカニズムによって、そうなるのか、というような問題が見落されている。

②0 新明正道著「社会学的機能主義」P. 34. 誠信書房、1967年。

②1 I. C. S. P. E. 編「I. R. in S. Ph. E. ; Sociology より」1966年。

このような問題へのアプローチの方法には現代スポーツの諸問題と、現代社会の諸問題との関連についての深い洞察が必要なことは言うまでもない。

しかしながら、ここにおいても、各々の角度からの問題の見方が可能である。

現代スポーツの諸形態の種類から出発すれば、いわゆる avocation としてのスポーツ、チャンピオンとしてのスポーツ、プロ・スポーツというような分け方も可能であるし、又竹之下休蔵先生のように、スポーツの大衆化と高度化とを併せて考えて、大衆化をめぐる問題、チャンピオンのスポーツをめぐる問題、プロ・スポーツをめぐる問題⁽²²⁾ とすることも妥当であろう。このような、いわばより具体的な問題からの接近に対して、より巨視的な問題からみて行く事も出来る。

例えば、現代社会の問題の把握から入るならば、問題のとらえ方にもさまざまな異論はあるが、Sport に大きな関連をもつものとして、大衆化とスポーツ、都市化とスポーツ、産業化とスポーツ、など、主に現代社会の特質との関連から問題を領域区分的にとらえる事も出来よう。どちらのとらえ方も有意かつ重要であって、相互に補ない合って、理論を構成していかなければならないと思われる。

いずれのとらえ方にしろ、この領域における中心の問題は、Sport と社会の相互関連であって、その関連をどのようにとらえるかが問題である。

例えば竹之下休蔵先生は、スポーツの社会的側面からの構造として、多角的な視点から、スポーツ人口の構造をとらえ、人口構造を形成し、又変動させて行く社会的要因の追究、及び人口構造の変動から派生するスポーツの社会的側面の追究によってスポーツ社会学の体系的方法とせられている。

この領域における問題への基本的なアプローチのしかたには、社会学的には文化社会学（文化が、歴史的社会的制約なしには考えられないとする立場に立ち、文化と社会を不可分離なものとして捉えようとする社会学⁽²³⁾。）的立場が重要であろう。そしてこの立場から問題へのアプローチに2つの方法が生まれる。一つは現状の諸問題を、歴史的社会的発展の過程として、文化と社会の相互関連として、いわば変動論を中核にして追究する立場で、歴史主義的性格のつよい社会学的立場であり、もう一つは文化人類学等と密接な関連を持ちながら問題を現次点に立って、行為様式あるいは生活様式として社会や人間との全体的関連からとらえようとする機能主義的立場である。

いずれの立場も、各々の存在理由をもっており重要である。

IV あとがき

社会現象としてのスポーツは、明らかにその存在した社会を反映する。従って、その限りで、スポーツを社会的に研究することによっても社会の諸問題とそのメカニズムを追究することが出来る。

近代以後、我々の日常の生には、拡大と発展に方向づけられた生産力の論理が貫徹している。そして、権力構造が生産力の論理に基盤を置きながら支配——被支配の関係としてあらわれ、体制は生産力の論理から娯楽を規定してきた。ところで娯楽は、本質的には日常的な生とは隔絶した秩序を持ち、非日常的な論理を基盤としている。だから娯楽を自己目的として追究する限り、それは生産力の論理に対立する怠惰の論理を追究するものであり、そうした意味で体制もしくは権力とぶつかり合うのである。

自己目的としての娯楽は、日常的、体制的秩序を打破し、生の充実に対する本能的意識を明確にする限りで必然的に反権力思想の土壌となる。

⁽²²⁾ 竹之下休蔵、磯村英一著「スポーツ社会学」P.28 大修館 1965年。

⁽²³⁾ 福武直編「講座社会学第9巻社会学の歴史と方法：現代社会学の潮流」P.93. 東京大学出版会 1967年。

近代スポーツは秀れて特殊近代的であり、非娯楽的である。それは娯楽領域に於る生産力理論の貫徹である。それ以前のスポーツが権力の弾圧を受けたのに対して、近代スポーツは近代資本主義的社会行動を反映した限りで体制に組み込まれている。

以上のことがらは末だ仮説である。スポーツに関する社会学的研究は、こうした問題への解答となるであろう。

スポーツはそれに関する著るしい科学的進歩にもかかわらず、依然として多くの本質的な偏見にとりまかされている。身体的能力に対する社会的評価は、アマチュアリズムがその一端を示めすように必づしも正当ではない。

それは人間に対する一つの偏見——身体と精神の関係——や人間の社会的行動に対する偏見——Play と Work の関係——に根拠を置いている。それらは恐らく西洋文明の伝統としてのプロメテウス——ディオニソスの二元的思想や、それに基づく価値的態度と結合しているのであろう。

スポーツに対する正しい態度は、人間と、彼の社会的行動に対する偏見の除去によってもたらされ、又それをもたらすのである。

社会学が実践科学であるように、スポーツ社会学も人間行動科学として秀れて実践的でなければならず、第一に偏見に対する闘いでなければならない。

引用文献

1. P. C. MacIntosh; Sport in Society p.11 1963.
2. 竹之下休蔵・磯村英一著；スポーツの社会学 P.13~14 1965年.
3. International Council of Sport and Physical Education; Declaration on sport 1964.
4. MacIntosh, op. cit. p.116—133.
5. Wolfenden Committee; Sport and Society p. 3 1961.
6. H. W. Morton; Soviet Sport p.17—31, 104—122 1963.
7. R. H. Boyle; Sports Mirror of American Life p.58—59 1963.
8. A. Parry; Sports (Encyclopedia of Social Science vol.14 p.305—308) 1955.
9. R. Caillois; Man, Play, and Games p. 3—10 1961.
10. J. Huizinga; Homo Ludens p. 50 1950.
11. 竹之下・磯村共著；前掲 p. 22.
12. 竹之下・磯村共著；前掲 p. 18.
13. 日本社会学編；現代社会学入門 p.180 1962年.
14. I. C. S. P. E. ; The Point of View of a Social Scientist, 1961.
(International research in sport and physical education)
15. 竹之下・磯村共著；前掲 p.19—20.
16. 竹之下・磯村共著；前掲 p. 20.
17. A. Wohl; Conception and Range of Sport Sociology, 1965.
18. I. C. S. P. E. ; New patterns in Social Relations, 1966.
19. J. Dumazedier; The Point of View of a Social Scientist, 1966.
20. 新明正道著；社会学的功能主義 p. 34 1967年.
21. I. C. S. P. E. ; Sociology, 1966.
(International Research in Sport and Physical Education)
22. 竹之下・磯村共著；前掲 p. 28.
23. 福武直編；講座社会学第9巻社会学の歴史と方法 p. 39 1967年.

(昭和44年9月27日受理)

